

感性価値の創造で差別化 100周年機にSDGsに着手

株式会社山田写真製版所
代表取締役社長

山田 秀夫 氏



今年創業100周年を迎えられます。どのような変遷でしたでしょうか。創業者である祖父の山田啓三は活版所の息子として生まれましたが、早くに両親を亡くし、上京して東京の印刷会社で働きながら、高等工芸学校の夜学で印刷を学びました。1921年に帰郷し、印刷会社の2階で写真製版所を始めました。1936年に火災で、45年には富山大空襲で2度も工場を焼失しま

すが、真面目な仕事ぶりに周囲の応援もあり、再興してきました。父の山田利雄は戦後間もなく入社しました。祖父母と工場長と父だけの小さな製版所でしたが、57年に東京の大手印刷会社を視察して大いに刺激を受け、すぐに東京へ進出。東京のお客様と富山の工場を夜行列車で往復する生活をしばらく続けました。仕事が軌道に乗ってくると、東

京五輪を契機に脚光を浴びたカラー印刷に対応し、67年に北陸で初めてカラー製版の設備を導入。その後も積極的に設備投資するとともに、QCサークル活動を実施して、職人の気分と勤に頼っていた仕事を標準化し、品質の向上に努めました。89年には国の中小企業合理化モデル工場に選ばれました。

—製版から印刷分野へ進出—
積極的に最新設備を導入されてこられたのですね。

しかし、90年代後半から印刷、製版のデジタル化が急速に進み、仕事が減少し価格も下がりました。少部数の印刷に対応できるように簡易的なオンデマンド印刷機を入れ、2005年には本格的に印刷業への転換を決断して最新の印刷機を導入し、企画・製版から印刷・製本までの一貫体制を築きました。本格的に印刷分野に参入され、どのような変化がありましたか。

一番変わったのはお客様です。製版だけなら相手は印刷会社さんですが、印刷業となるとお客様は多種多様になります。

そこで、当時、国内で数台しかなかった10色印刷機の導入に踏み切りました。通常カラー印刷は4色機で行いますが、10色機では裏表両面に通常のカラーに加え、金、銀などの特色や表面のニス加工などを使うことができます。父が10色機の導入を決断した時、大きな投資でしたが、品質面やコスト競争力で優位性があると感じました。

また、印刷は様々な紙にインクをのせなくてはいけないので、発色の良さを求めると、使う紙によってデータの作り方を変える必要があります。製版で培った技術と知識に、実際の印刷工程の実務が

加わることで、製版技術もさらに向上しました。

全国カレンダー展、全国カタログ展、造本装幀コンクールに毎年、当社が手掛けた製品を出品していますが、いずれのコンクールでも最高賞を受賞しました。地方の印刷会社で3つともグランプリを取った会社はないでしょう。

現在のコロナ下では、抗菌・抗ウイルス印刷が注目されています。当社でも抗菌加工の認証を取り、10色機の特性を生かして抗菌印刷を医療機関などに提案しています。2007年には業界で著名なプリンティング・ディレクターを招聘されました。

現在、取締役を務める熊倉桂三は、日本を代表するグラフィックデザイナーの作品の印刷をいくつも手掛けてきた人物です。富山県が開いているコンクール「世界ポスタートリエナーレトヤマ」で当社が図録を製版し、印刷担当だった東京の大手印刷会社のプリンティング・ディレクターだった彼と一緒に仕事をしたのが、最初の出会いです。豊富な知識と経験と確かな感覚があり、一流のデザイナーと話ができる人間はなかなかいません。2007年に当社に来てもらいました。

現在、美術館や写真集などの仕事を数多く手掛けていますが、最

初は「富山県の山田製版」と言っても誰も知りませんでした。それが熊倉と行くと、長年の信頼関係があるので、仕事がやりやすいのです。社内で彼の後に続く人材を育成していますが、あのレベルに到達するのは至難の業です。

—デジタル時代への対応—
今後の展望を教えてください。

去年は新型コロナの影響で、イベントや展覧会が軒並み延期になり、売り上げは落ちました。またデジタル化が進み、印刷自体が減少しています。そんな中でも芸術的、文化的に優れた作品はデジタルの画面には負けません。インクの発色、文字の形や大きさ、紙の手触りなど、むしろ私たちの方が感性豊かで、感動を与えるものを提供できると自負しています。「いいな、きれいだな」と見る人の感性を養う仕事をしていきたいと思っています。

とはいえデジタル化への対応は必要です。現在、テレワークを中心としたニューノーマル時代の働き方の推進を図っていますが、印刷技術の向上のためにも品質管理、生産管理、営業管理など全ての業務にデジタル化の取り組みが必要だと感じています。昨年、30代の甥が入社し、私の息子も近く入予定です。新しい時代には、若い

世代に引き継いでいきたいと思っています。

100周年記念事業はお考えですか。コロナ禍の節目として良い機会だと思い、社内でSDGs（持続可能な開発目標）に取り組みます。先日、リモート形式で全社員がコンサルタントの研修を受けました。関心の高い社員も多かったようです。5月からプロジェクトチームを作り、本格的に勉強会などを実施していきます。技術の向上や効率化だけでなく、これから印刷業が脱炭素社会に向かって果たす役割を考えながら、企業活動を続けていきたいと思っています。

座右の銘をお尋ねします。

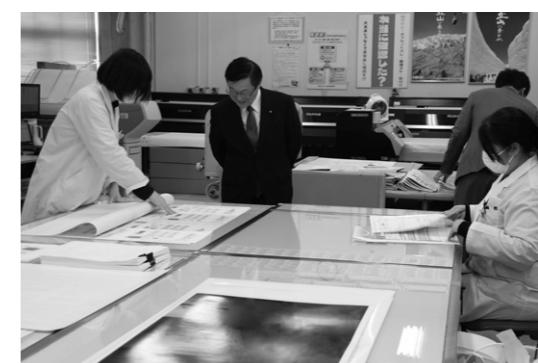
2つあります。1つ目は「我を非として当る者は吾が師なり」。自分の欠点を指摘し、厳しいことを言ってくれる人は先生だということで、父から教わりました。

もう1つは「苦難は幸福の門」。自然災害や新型コロナウイルスなど多くの困難が襲いかかっていますが、こんな時こそ自分が磨かれる時です。工場を焼失しても何度でも立ち上がった祖父に比べるとまだまだ楽なもの。苦難から逃げずに、一歩ずつ前に進んでいきたいと思っています。

会社概要

株式会社山田写真製版所

創業：1921(大正10)年5月
所在地：富山市太田口通り2-1-22
資本金：4,500万円
事業内容：高品位印刷、オンデマンド印刷、企画・デザイン、DTPデータ編集入力、製版、製本・加工、ホームページ制作
従業員数：166名
売上高：16億円(2020年12月期)
事業所：東京本部、金沢支店、新潟支店、長野営業所
URL：https://www.yppnet.co.jp/



製版の現場は白衣がユニフォーム

略歴

1949(昭和24)年2月高岡市生まれ。1971年学習院大学経済学部卒、73年千葉大学工学部印刷工学科卒。大同印刷(株)勤務の後、74年(株)山田写真製版所に入社し、東京支社勤務。79年に常務に就き、専務東京支社長、副社長を経て、2007年から代表取締役社長に就任。